

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第51号

平成29年7月11日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

久子の方、出身は甘南備か、京都か

最期の地、墓も、甘南備（富田林）と伊自良（山泉市）に

正行の末裔、藤田さんとの出会い

6月例会では、「久子の方と正行」をテーマに学びました。今回の資料集めの中で、岐阜県山県市長滝在住の藤田力弥さんという方が『楠公夫人精説』という本を刊行しておられることが分かり、早速取り寄せました。

藤田さんとの出会い（メールのやり取り）は衝撃的なものでした。

『うちの家系図は、正行が結婚していたことが大前提です。正行は内藤家の娘を嫁にもらい、正行の子を身ごもります。その後、正行は四條畷の合戦で討死します。ただし、内藤の在所が北朝に加担したために、激怒した三男正儀公に追い出され、すべてを受け入れた池田教依（池田城城主）の後妻となり、池田正教（幼名多聞丸）を生みます。

その後、三重県山口田垣城に出向き、内藤の藤と、池田の田で、「藤田」正澄と名乗ったのが家祖です。』

そして、さらに調べていくと、この事実を裏付けるかのごとく、地域文化誌「まんだ」の2004年第80号の「楠正行遺腹の子」（岡沢新吾）論文に出会ったのです。この論文の内容については、正行通信52号で触れたいと思います。

また、藤田力弥さんは、久子の方＝楠公夫人＝万里小路藤房妹説（京都誕生説）を説いておられたのです。楠妣庵観音寺発行の略記には、楠公夫人＝南江正忠妹説（甘南備誕生説）が記されています。

以下、久子の方について、この二つの説の骨子をご紹介します。

● 南江正忠妹説（甘南備誕生説） ●

* 楠妣庵観音寺略記より

楠公夫人の名は久子（観心寺の過去帳に依る）と言い、甘南備の豪族南江備前正忠の妹で、富田林市大字甘南備矢佐利に誕生した。元亨3年（1323）20歳で楠木正成に

嫁ぐ。

元弘以来の騒乱が続き、夫・正成は湊川の戦いに、そして長男・正行は四條畷の戦いに戦死したのち、名を敗鏡尼と称し、二人を含め楠一族郎党の菩提を弔うため、生まれ故郷の甘南備に隠棲し、寂寥の余世をここに過ごした。その庵を楠妣庵という。

正平19年（1364）7月17日、61歳で没。

なお、楠木の二字、正行に至り楠の一字となした、と伝わる。

<久子の墓>

600年近く、ささやかな五輪一基さびしく祀られていたが、現在は玉垣が作られ、境内の一角に奉祀されている。その傍らには楠氏一族の供養塔が建立されている。

● 万里小路藤房妹説（京都誕生説） ●

* 楠公夫人精説より

藤田力弥氏は、以下の通り述べている。

万里小路（藤原）藤房は、後醍醐天皇の側近で、天皇の命を受けて繪旨を正成に伝えた公家であり、この降嫁は正中の変の翌年であることから、勤王の士を募っていた宣房（のぶふさ）の子藤房が、畿内に勢力をもっていた楠木正成を倒幕勢力に引き込もうとして、妹の滋子を降嫁させることを思いついたのではないかと。

しかし、公家の娘のまま土豪に嫁がすことなど前例のないことなので、公家の家臣の養女にしてからの流れだと思ふ。

万里小路家古文書の滋子の名は、改名されたか、久子の名が後の創作かは、定かではありません。しかし、湊川神社の甘南備神社には楠木滋子の名前が刻まれていますし、久子が晩年を過ごした観音寺楠妣庵が藤房創建と伝えられていることから、この説を取り上げます。

<久子、最期は伊自良（岐阜県山県市長滝）説>

正平14年11月、楠正儀の根城である東条城は、畠山

国清によって攻められている。翌年赤坂城が陥落し、行宮観心寺も侵され、河内は戦禍に包まれた。

東条城と甘南備はあまりにも近い。楠公夫人は、正平14年の畠山国清の侵入を前に逃げたか、正平15年、戦禍の中を命からがら逃げだしたのではないか。

楠公夫人は、熊野古道を使って紀州へ、そして脇屋義助伝聞のもう一つの甘南備＝伊自良へ向かった。

(その根拠は以下の通り)

- ・甘南備という非常に珍しい地名が共通である。
- ・伊自良の地の甘南備神社が楠一族の祖先(美努王みのおおかみ:葛城王[橘諸兄]の父)を祀る神社である。
- ・甘南備神社の例祭が17日で、楠公夫人の命日と同じである。
- ・楠公夫人の念持仏、十一面千手観音を、甘南備神社を祖とする甘南美寺が本尊とする。観心寺、楠妣庵観音寺も共通である。
- ・伊自良の地、上伊自良村の字名、長滝・平井・松尾等が甘南備周辺の字名と共通する。(久子の方は、晩年、日本中の神奈備[神の棲むところの意]という地を旅し、この伊自良の地が気に入り、甘南備神社〔甘南美寺の奥ノ院〕に籠って地域の人々の尊信を得て、各所に自身の郷里の地名を与えた、との伝承が残る。)
- ・甘南美寺、楠妣庵観音寺共に臨済宗妙心寺派である。
- ・湊川神社内、楠公夫人を祀る神社も甘南備神社である。

(月例祭は久子の方の命日の7月17日にちなみ、17日に行われる。)

そして、山県市長滝(旧伊自良村長滝)には、楠公夫人の墓と伝わる八王子宮という碑があります。

<八王子宮>

楠公夫人の墓 伊自良湖口七社神社には室町時代の武将、楠木正成の夫人のものとして伝えられる墓があります。

恋人の生地というキャッチコピーは、この伊自良湖を、夫婦円満の鏡ともいわれる楠公夫人のお墓にちなんで名付けています。

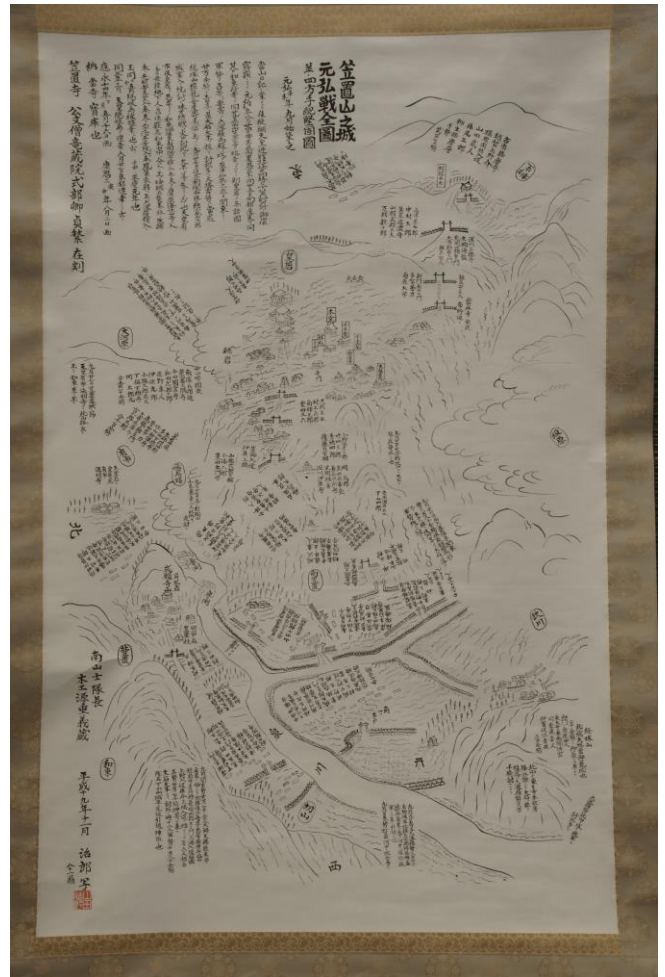
久子の墓は、甘南備そして伊自良にも

楠妣庵観音寺略記によると、久子は甘南備の豪族、南江正忠の妹で、20歳のとき正成に嫁いだ、とあります。

そして、正成、正行戦死の後、生まれ故郷の甘南備に隠棲し、今も楠妣庵観音寺の境内の一角に久子の墓が残っています。

一方、「楠公夫人精説」(藤田力也著)によると、万里小路藤房が、畿内に勢力を持っていた正成を天皇に味方させるために、妹の滋子を家臣の養女にしたうえで、久子と名乗らせ正成に降嫁させたものではないか、としています。

また、久子の晩年についても、戦果に包まれた河内を抜け出し、甘南備という地を訪ねて伊自良に辿りついた、とします。伊自良には、楠公夫人の墓と伝わる八王子宮があります。



笠置山城 元弘戦全圖

総大将、足助次郎重徳の名前がくっきり

四條畷市上田原在住の船本平治さんは、扇谷が車の購入や車検・修理等で、長年お世話になっている方です。

最近、車検やパンク修理などで何度かお訪ねすることがあり、拝著『楠正行』もお読みいただいていたことから、雑談の中で、『扇谷さん。実は、いま私の手元に、兄が写した笠置寺の元弘戦図がありますが、見られますか。』と云われ、拝見させていただきました。

天地150センチ、左右90センチほどの大作で、笠置寺保存の原図に重ねて模写された作品ということです。

実は、船本さんは笠置のご出身で、模写されたお兄さん、山田治郎氏(91歳)は今も笠置でお暮らしのこと。

早速、国府世話人同道の上、撮影させていただいたのが上の写真です。

6月の例会当日は、大きく引き伸ばしてホール内に掲示をしましたが、笠置山全体の様子はもちろんのこと、各所に配置した総大将、足助次郎重徳以下の武将の名前もくっきりと読むことができます。

四條畷の合戦で、いったい、だれがどこで戦ったのか、その詳細を示す史料は残っていません。このような史料を後世に残すことの大切さを痛感しました。

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)